惑いの年

阿部牧郎

惑いの年

阿部牧郎

講談社

惑いの年

一九九五年三月十日　第一刷発行

著　者　阿部牧郎
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二―〇一
電　話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六一二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　和田製本工業株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
©Makio Abe 1995 Printed in Japan

ISBN4-06-207401-X　（文2）

目次

第一章　冬の稲妻　5
第二章　流浪の民　47
第三章　惑いの年　87
第四章　月明りの部屋　129
第五章　海老の眼　174
第六章　聖家族　217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

惑いの年

装画　濱野彰親
装丁　安彦勝博

第一章　冬の稲妻

1

水曜は定休日なのだが、島岡浩介は午後四時ごろ店へ出た。

あすから一週間、開店一周年の特別メニューを出す予定である。ランチは餃子ふうのパステリートとオムレツ、ディナーは魚貝類、野菜のブイヤベースをオーブンで焼いたサルスエラが中心になる予定だった。

コックの板井がすでに材料の仕入れを終え、調理場でスープを煮ていた。島岡はワインや酒類のチェックを済ませ、予約客のリストにあらためて目を通した。

一ヵ月まえから客に刷り物をくばって予約をつのった。おかげでディナーは一週間ほぼ満席である。だが、ランチのほうが六割ぐらいしか捌けていない。京都・北山通りという場所がら、昼間は学生客が多く、一人前四千七百円の設定がやはり高価すぎたのかもしれない。それ

でも不況のおりから、ディナーの予約がいっぱいというのは上できというべきだろう。
「けっこう申し込みがあったなあ。安心したよ。きみの料理にみんな期待しているんだ」
調理場の板井へ島岡は声をかけた。
板井は二十六歳。まだ独身である。東京のレストランで修業をつんだが、本場で勉強した経験はない。おかげで島岡は気軽に味つけの注文ができる。
「マスターのご指導のおかげですよ。それにうちはワインで助かっています。少々料理の腕が劣っていてもそっちで救われる」
「いや、ワインにうるさいお客さんはまだわずかだよ。やっぱり料理がメインだ。ワインがどんどん出るようになると、客単価があがって助かるんだが」
島岡は苦笑してワインラックを見た。
ブルゴーニュ産を中心に精選したワインをそろえてある。だが、値段を気にせず味と香りを楽しんでくれる客はまだほんの一部だ。
レストラン「島岡」は表通りに面したビルの一階にある。四人用、二人用のテーブル席が三組ずつ。ほかに十人掛けのカウンター席があった。メニューはスペイン料理が中心だが、スパゲティやピッツァの用意もあった。島岡は支配人とソムリエとウエイターとレジを兼ねている。ときおり調理場に入って板井の手伝いもする。お運びの女の子は昼夜一人ずつ交代で出勤してくる。

島岡は五十三歳である。三十年近く勤務したQ電機を去年の春退社した。取締役、半導体事業部の営業部長が最後のポストだった。三年間部長をつとめたあと、子会社の社長就任を命じられて転職を決意した。あとでわかったことだが、大手企業のQ電機で曲りなりにも取締役に昇進できたのは、子会社への移籍を前提とした人事だったのだ。

長年、生命をすりへらすような激務に耐えてきた。その結果子会社へ移籍となって、島岡は体のなかの焔が消えたのを感じた。四六時中ビジネスから尻を叩かれる生活からそろそろ脱け出したくなった。停年後小さなレストランをやりたいという気が漠然とあって、以前からそれなりの準備もしてきたのだ。

二人の子供のうち長男は大学を出て就職し、長女は高校三年だった。転職にこれという支障はなかった。辞表を出したあと、島岡は開店の準備にとりかかった。当時は大阪に住んでいたが、店をやるなら京都だと以前からきめていた。ビジネスで沸き立っている大阪へいまさら乗り出してゆく気はない。おだやかで文化的な雰囲気の濃い京都で、無理のないささやかな営業をするのが夢だった。

半年かかって北山に手ごろな店を見つけた。史蹟の多い古い街並の外に新しく開発された一帯で、付近にはさまざまな文化施設のほかブティック、ビデオショップ、CDショップなど若い世代向きの店が並んでいる。レストランや喫茶店も同様である。逆に年齢の高い客層を設定した営業をやれば、案外支持されるだろうと見通しが立った。

退職金に加え、大阪の家を売って資金をつくった。歩いて店に通える場所にあるマンションへ一家で引越した。一流のレストランから板井を引き抜き、料理の味も値段も店の内装も周囲よりやや高い水準においてオープンした。結果は悪くなかった。どこを見ても若者の店ばかりで行き場のなかった四十代五十代の客が家族と食事にきてくれる。半年たらずでレストラン「島岡」は黒字を出すようになった。まだ収入はサラリーマン時代と大差ないが、人間関係の苦労がなくなったぶんだけ儲けものだと思っている。

暖があいてフラワーショップの男が配達にやってきた。仕入先から祝一周年の花がとどいたらしい。酒、コーヒー、食料品の店からすでに花が送られてきている。

受取りにサインして島岡は花束を受けとった。白い百合とブルーファンタジア、赤いグロリオサの三種の花が胸もとにあふれ返った。贈り主のカードへ島岡は目をやった。

「開店一周年おめでとうございます。小泉早苗」

美しいペンの筆蹟を見て島岡はしばらくぼんやりとなった。

心当りのない名前である。仕入先ではない。お客でもない。Q電機にそんな女性がいたかどうかよくわからない。大学や高校の同級生でもなかった。もちろん妻の昭子(あきこ)の友達にも小泉早苗という女はいない。

だが、完全に知らない名前でもないようだった。ずっと以前きいたような気がする。一度か二度会ったことのある相手かもしれない。いや、Q電機時代に利用した大阪北新地(きたしんち)のどこかの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

酒場の女なのではないか。
カードには小泉早苗の肩書も電話番号も記されていなかった。キツネにつままれた思いで島岡はカウンターの大きな青磁の壺に活けてあったバラを他へ移し、新しい花束と入れ換えた。豊かに盛りあがった葉の繁みのうえに三種の花が噴きこぼれたような豪華な飾りつけになった。カウンター席の客は、花の香りに陶酔するだろう。
しばらく島岡は花に見惚れた。商売に関係のない人から贈られた花はありがたく、うれしかった。まして相手は女性である。どんな人なのだろう。考えると、おちつかない気分になる。なにかが起りそうな気がする。だが、人生に過大な期待をかけることのおろかしさを知らない年齢でもなかった。すぐに島岡は花を見るのをやめて、壁の画や壁掛けの取替えにかかった。こんな話はたいてい拍子ぬけで終るものだ。小泉早苗という女性は保険のセールスマンかあやしげな宗教団体の普及員あたりではないだろうか。
三十分後、島岡は調理場へ入った。板井を手伝ってシャーベットやケーキづくりにかかる。終れば準備完了だった。板井と鮨でもたべて帰るつもりである。
そばにおいた携帯電話が鳴った。耳にあてると、女の声がきこえた。島岡さんですね。念をおしたあと、小泉早苗です、と口ごもりながら女は名乗った。
「さっきお花がとどきました。ありがとうございます。すばらしい花です」
いいながら島岡は懸命に記憶をたどった。

声をきいても早苗の顔が浮かんでこない。若い女ではなさそうである。
「昼すぎにお電話したんですよ。お店のかたが出られて、きょうは定休日やけど島岡さんは四時ごろお見えになると教えてくれはりました。一周年記念の準備のためって」
「なるほど、それでお花を。失礼ですが、いまどちらにおいでなのですか」
「西宮です。島岡さん、私のことをおぼえておられないでしょう。もう十五年もまえになるわ。ほんのゆきずりやったし」
「ゆきずり。十五年まえ――。すると、あなたは宮崎でお会いしたあの奥さんですか」
島岡は声が大きくなった。一気に記憶がよみがえった。
といっても小泉早苗の顔がはっきり浮かんだわけではない。十五年まえ、一度だけベッドをともにした女なのである。おだやかな、優雅な顔立ちだったことはおぼえている。口数のすくない、内気そうな人妻だった。ライトブルーの布地に白い花模様の入った涼しそうな服を着ていた。そして、彫りこまれたような起伏のはっきりした裸身をしていた。その裸身が信じられないほど淫らな姿勢をとった。
「あなただったのか。なつかしいな。よく連絡してくれましたね。もう会えないと思ってあきらめていたんだ」
こんどは島岡の声がこわばる番だった。
彼女と知りあってすぐ島岡は名刺をわたした。彼女のほうは住所も電話番号も教えてくれな

かった。連絡を島岡は待ちつづけた。だが、一度も電話はなかった。淡い期待を一、二年は抱いていたが、やがてすべてが記憶の底に埋めこまれた。

「よかった。おぼえていてくれはったんですね。お電話するの私、とても恐かったの」

いつかは島岡に電話しようと早苗は思いつづけていた。だが、なんとなく実行しそびれたまま月日がたった。

最近身の上に変化が起った。島岡に会いたくてたまらなくなり、Q電機へ電話してみた。退職したときいて茫然となった。気をとりなおして人事部へ電話を回してもらい、現在の連絡先を教わったという。

「じつは私、おとといそちらへうかがったんですよ。けど、お店へ入る勇気がなかったの。遠くからでもお姿を見ようと思って通りの向う側に二時間ほど立っていたわ。外へ出てこられないので、あきらめて帰りました」

「二時間も——。入ってくれれば良かったのに。どうして遠慮したの」

「お店に奥さんがおられるかと思って。それに自信もなかったの。十五年もたったのよ。私、すごいお婆さんになってしまった」

「おたがいさまですよ。そんなことは気にしないで会おう。店へきてください」

妻の昭子はここ数年、心臓に障害が出て不整脈や息切れになやまされている。家事だけで精一杯の体である。店には出てこない。そう島岡は教えてやった。

いまから出てきませんか。島岡はさそってみた。笑って早苗は断わった。西宮からとなると、二時間ぐらいはかかるはずだ。
「ではあしたでもあさってでもきてください。つもる話がしたい」
「けど、島岡さんお店があるんでしょう。時間がとれないわ。残念ねえ。きょうがお休みと知っていたら、どこかへ食事におさそいできたのに」
「京都は水曜日に休む店が多いんです。デパートの定休日がむかしから水曜なので、右へならえでそうなったらしい。そうだな、いわれてみると、来週の水曜日までゆっくり時間がとれそうもないな」
店は午後二時までがランチタイム、五時からディナータイムになる。
三時間店をしめるのだが、その間はディナーの準備で忙殺される。とても早苗と会っているひまはない。午後五時以降も自由になれない自営業者の身を初めて島岡は不便に感じた。これまでは毎朝目覚時計で起きる必要のない身分になったのを、ありがたく思うだけだったのだ。
では来週お会いしましょう。それまでにまたご連絡します。告げて早苗は電話を切った。彼女の番号を訊くひまがなかった。
しばらく島岡はぼんやりしていた。あまりに意外な音信だった。なつかしい女に再会できるよろこびよりも、あっけにとられた思いのほうが色濃かった。十五年間も音沙汰のなかった早苗がなぜ連絡してきたのか。急に島岡を必要とするような事情がなにかできたのだろうか。彼

女との再会が島岡にとって良いことなのかどうかも見当がつかない。
だが、しだいに島岡は幸福な気持にひたされてきた。たった一日のことにしろむかし性のよろこびを共有しあった人妻が島岡をわすれずに電話してきたのだ。その事実をすなおに受けとろうという心境になる。
彫りこんだように起伏のゆたかな早苗の裸身のイメージがさっきから脳裡に浮き沈みしていた。裸身は地に伏せたり、大きく脚をあげたり、さまざまな姿勢をとってあえいでいた。顔立ちははっきり思い出せないのに、体のイメージはあざやかに残っている。早苗は性に貪欲な女だった。島岡がこれまで知った相手のうちで、早苗ほど激しく性を楽しむことのできる女はいなかった。その点で島岡は早苗がわすれられない。十五年まえの、あの目のくらむ場面をまた体験できそうだと思うだけで息苦しくなってくる。
半面かすかな怯えもあった。せっかく手にいれたおだやかな暮しが、早苗との再会によって滅茶滅茶になってしまいそうな予感がある。こんどはゆきずりの情事ではないのだ。三日も会わないと苛立たしくて仕事が手につかないような関係になる可能性がある。
良いではないか。五十をすぎて性の泥沼を這いまわるのも男の一つの栄誉だろう。いけるところまでいってみるべきだ。島岡は自分にいいきかせた。そう結論すると、来週の水曜日が待ち遠しくてたまらなくなった。
「マスター、なにをぼんやりしてるんですか。クリームが固まってしまいますよ」

板井の声で島岡はわれに返った。照れ笑いして杓子を手にもった。

2

東海、関西地方が暴風雨圏内に入ったというニュースが嘘のようだった。南九州は晴天で、冷たいほど空が冴えわたっていた。

島岡浩介は宮崎市内からタクシーで空港へ向かった。午後六時の便で大阪へ帰る予定である。一昨日から市内に滞在して、半導体工場の建設用地を物色してまわった。宮崎は水と空気が清浄で、気温も暖い。交通の便もわるくはない。半導体の製造工場を建てるには、もっとも条件のととのった地域だった。

技術部長と検討をかさねて、最終的に候補地を二つにしぼった。大阪本社へ資料をもちかえってトップの承認を得れば用地の買収は終る。来年のいまごろは、宮崎工場から製品がさかんに出荷されているだろう。

技術部長は福岡支店に用事があるとかで、一足早く列車で宮崎を出発した。島岡は工場の建設をめぐってさっきまで地元の建設業者と打合せしてきたところである。予定した仕事はすべてかたづけた。ほっとしているが、宮崎に二泊して夜の盛り場見物も終ったから、もうこの地であそぶ気はなかった。早く大阪へ帰って家族とくつろぎたい。最近出張が多くて疲れ気味で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.